信州歴史ツアー記念文集

（平成２５年５月１５．１６日）

米欧亜回覧の会

井出家門前にて

中棚荘にて　夕食の乾杯

橘倉酒造歓迎の挨拶

井出家に残る遺墨の数々

旅行中のバス

中棚荘の玄関

米欧亜回覧の会　信州歴史紀行　目次

		頁
１・信州歴史の旅に想う　・・・・・・・・・・	泉　三郎	１
２・信州歴史ツアー・雑感　・・・・・・・・・	井出亜夫	２
３・長野の旅　・・・・・・・・・・・・・・・・	梶　春治	７
４・松代・小諸・佐久の旅に想う　・・・・・	金本君子	９
５・信州歴史ツアーの随想　・・・・・・・・・	高倉宣夫	１１
６・信州行に寄せて　・・・・・・・・・・・・	大森東亜	１２
７・信州（小諸・佐久）の旅を回顧して　・・	堀江　興	１４
８・幕末・明治を偲ぶ信州の旅　・・・・・・	塚本　弘	１７
９・洛陽の牡丹（俳句）　・・・・・・・・・・	大場梅子	１９
１０・佐久の旅―草笛連想　・・・・・・・・・・	山田哲司	２０
１１・長野県の伝統文化と１９８０年代の チリ社会と駐在生活　・・・	納家弘美	２３
１２・信州・佐久・小諸の旅路に想う　・・・・	橋本吉信	２９
１３・象山と小楠の人脈　・・・・・・・・・・・	小野博正	３３
１４・俳句で辿る信濃紀行　・・・・・・・・・・	小野博正	３５
１５・編集後記　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		３６

＊写真提供：　小坂田國男氏　　橋本吉信氏　　編集責任：小野博正

信州歴史の旅に想う

泉　三郎

「米欧亜回覧の会」の旅は、このたびもまた、とても内容の濃い素晴らしい旅になりました。井出さんの志高き周到な企画と小野さんのいつもながらの行き届いたお世話ぶりのお陰であり、こころより感謝します。そして「旅の楽しさはお仲間による」といいますが、まさにその通り。旅の道すがらも、食事の間も、リンゴ湯でくつろぐときも、夜の宴やその後の語らいでも、複眼の旅、多感の旅、共鳴・共感・共愉の旅でありました。

「旅は若返りの泉」ともいいますが、好奇心を刺激し、感性を甦らせ、心身ともに活性化してくれますよね、みなさん、三歳は若くなったんじゃないですか？

今回は、思いつくまま、七五調だけという迷句駄作で感想を記します。

松代の象山記念館と文武学校で…

象山の　眼光拝し　わが士魂
凛然として　甦るらん
初夏の風　素読の声が　のってくる
真田の里の　文武学校

小諸の古城で

白髭の　熊二師に　誘われて　藤村の
小諸に生きる
紅浅間　燃ゆるこころが　躍動す
パリに遊んだ　大和魂

佐久平で

学舎の　白き搭屋　藤に映ゆ
大真面目　ピンコロ地蔵に　願かける
若緑　五陵の濠に　風清し

橘倉酒造で

風薫り　富貴の歴史　白牡丹
国の交わり　麗しきかな
酒蔵に　十八代の　歴史あり
文の交わり　墨蹟にみる
兆民の　気概伝える　井出家かな
佐久の平に　民権の風

信州歴史ツアー雑感

井出亜夫

（はじめに）日米欧亜回覧の会「歴史ツアー」として信州歴史ツアーをご提案申し上げたところ、5月 15 日、16 日の両日好天に恵まれ 16 名の参加を得て挙行されました。以下ツアーの雑感を記します。

１．（松代　象山神社、文武学校等訪問の記）信州松代藩は小藩であるが、18 世紀半ば、恩田木工による藩政改革（日暮硯岩波文庫参照）と幕末の思想家佐久間象山の名で名高い。松代藩は明治維新において特段の役割を果たしたわけではないが、長州藩吉田松陰、長岡藩小林虎三郎（山本有三作米百俵のモデル）等の師である佐久間象山の影響は大きかった。佐久間象山の省ケン録（1854 年門人吉田松陰に勧めてアメリカ密航を企てた罪に連座して獄に下る。獄中憂国の至情あふれて著した一巻）にある次の一節を象山神社にある碑に見る

「余歳二十以後即ち匹夫の一国に繋がり有るを知る　三十以後即ち天下に繋がり有るを知る　四十以後即ち五世界に繋がり有るを知る」（原文は漢文）

松代藩から江戸に出、ペリーによる黒船来航に直面した象山の人生行路の感慨を端的に著したものであろう。開国論者（幕末のグローバリスト）であった象山の面目躍如たるものがあり、私は行政官時代、この拓本をオフィスに掲げ、外国からの賓客にその所以を説明すると話が広がった。

儒学に続き洋学・砲兵学（訪問した松代藩藩校「文武学校」では象山の影響もあり、洋学も教えられていた）を学んだ佐久間象山は、来航したペリー艦隊に抗すべくもない日本の技術水準を即座に判断し、西洋の技術を学びそれに対抗する実力の養成を主張したリアリストであった。

この象山的リアリズムの片鱗でも持っていたら、無謀な太平洋戦争に突入する愚挙を回避する知恵が回りそうなものであったが、それが出来ずに独善に走った歴史の教訓をかみしめたい。

松代訪問時にご案内頂いた松代文化財ボランティアの会所属佐久間方三氏に感謝申し上げるとともに、佐久間象山研究者でもある佐久間氏よる「佐久間象山の漢詩（４）」の中から「洋書を読む」を以下に紹介したい。ここにも偏狭を排する象山の客観的な学問態度と政治哲学の真髄を見ることが出来る。

「漢土と欧羅（欧州）と　我に於いては倶（とも）に珠域（外国）　皇国は神教を崇び　善を取りて自らを補翊（ほよくー補い助ける）す　彼の美固より参ずべく　其の瑕（きず）何ぞ匿す（かくす）を須（もち）ー必要）いん　王道は偏党無く　平平として有極に帰す　咄（とつ）なる哉陋儒子　乃ち大惑を懐くこと無からんや」

原文漢文以下佐久間方三氏解釈

「漢土も欧州も私から見れば双方とも外

国である。我が国は昔から神の教えを崇び、漢土の革命の風習は取り入れなかったが、善いところは取り入れて自らを補ってきた。

欧州も漢土と同様に考え、その美点は云うまでもなく受け入れるべきで、多少の欠点はあるとしても、どうしてそれを隠す必要があろうか、隠す必要は無い。

王者の道は一方に偏ることなく、平らかで極地に至る道であり、学問の道も同じく、儒学である、いや洋学である、と一方に偏るのではなく、双方の美点を取り入れて行くことが肝要なのである。

私は見識の狭い儒者たちに呼びかけているのである。大きな惑いを懐くことは無いのかと。」

２．（無言館）今回は時間の制約で訪問できなかったが、上田市にある無言館（戦没画学生の展示館）には、冒頭に以下の詩が掲げられている。

～あなたを知らない～

１９９７年５月２日

窪島誠一郎（「無言館」館主）

遠い見知らぬ異国（くに）で死んだ
　　画学生よ
私はあなたを知らない
知っているのは　あなたが遺（のこ）した
　　たった一枚の絵だ
あなたの絵は　朱い血の色に
　　そまっているが
それは人の身体を流れる血ではなく
あなたが別れた祖国の　あのふるさとの
　　夕灼（や）け色
　あなたの胸をそめている
　　父や母の愛の色だ
　どうか恨まないでほしい
　どうか咽（な）かないでほしい
　愚かな私たちが　あなたがあれほど
　　私たちに告げたかった言葉に
　今ようやく　五十年も経って
　　たどりついたことを
　どうか許してほしい
　五十年を生きた私たちのだれもが
　　これまで一度として
　あなたの絵のせつない叫びに
　　耳を傾けなかったことを
　遠い見知らぬ異国（くに）で死んだ
　　画学生よ
　私はあなたを知らない
　知っているのは　あなたが遺（のこ）
　　したたった一枚の絵だ
　その絵に刻まれた　かけがえのない
　　あなたの生命の時間だけだ

窪島氏の詩は、戦争に散った全国各地の画学生の無念さに思いを馳せた素晴らしいアピールで、戦後平和を享受（戦後発展、高度成長、バブルに酔った）している私たちに強い訴えを発している。

ここで私は、侵略の被害をもろに受けた中国、韓国アジア諸国における被害市民への視野が欠けていなかったかに思い至る。漸く２０世紀末において河野談話、村山談話によってある種の総括がなされたが、歴史認識に関する特に中韓両国の対日認識は厳しい。教養と常識を欠いた昨今の政治家の発言を見るとき、グローバル社会における日本が世界の信頼と尊敬を受けるために何が不可欠なことであるかを改めて想起する必要があろう。

３.（小諸　小諸義塾、藤村記念館訪問の記）

小諸義塾は、明治初年未だ公教育としての中学校、女学校が全国に展開される以前にアメリカ留学から帰った木村熊二が、小諸の殖産興業先覚者のサポートによって開いた私学である。

ここに島崎藤村が招かれ、藤村はこの地において詩人から作家に転ずる。「千曲川のスケッチ」はこの山村周辺における自然と人々の生活を描いたものであるが、藤村はここにおいて「破戒」を構想する。総じて日本の自然主義文学は社会性を欠いた私小説の方向に展開されるが、「破戒」は差別部落が依然として残る未完の明治維新を示唆する一大文学と考える。

藤村は晩年大作「夜明け前」を著し、幕末・明治維新期の政治・社会状況の激変が地方に展開する様々な様子と維新に協力する庶民の期待を描写する。しかし、「広く会議を興し、万機公論に決すべし　上下心を一にして、盛んに経綸を行ふべし　官武一途庶民に至るまで迄、その志を遂げ、人心をして倦ざらしめんことを要す五箇条のご誓文 - 維新の理想」が変質していく過程を「御一新がこんなことでいいのか」と失望を隠さない青山半蔵の思いを随所に見ることが出来る（未完の明治維新）。

次に、旧来の日本の伝統的詩歌である和歌に対する藤村等による明治新思潮を偲びたい。

自　序（若菜集、一葉舟、夏草、落梅集の四巻をまとめて合本の詩集をつくりし時に）

『 遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。そはうつくしき曙のごとくなりき。

あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばゝり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくな りき。

うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。

伝説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帯びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壮大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆実なる青年なりき。

その芸術は幼稚なりき、 不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。

青春のいのちはかれらの口脣にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。

こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寝食を忘れしめたるを。

また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。

われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。

・・・・・・・・・・・・・・・

誰か舊き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじゝ新しきを開かんと思へるぞ、 若き人々のつとめなる。生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

・・・・・・・・・・・・・・

わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあ

つめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。』　　明治卅七年の夏

藤　村

４．（佐久市　旧中込小学校太鼓楼、竜岡城五稜郭建築の記）

旧中込小学校は明治８年（1875 年）年に建築されたわが国で現存する最古の洋風学校建築物で、昭和 44 年、国の重要文化財に指定された（長野県では、松本にある開智学校と並び有名、成知学校として創設）。村民協議のうえ、村民有志の募金を中心に建設させたもので信濃教育の源流の一つでもある。村に無学の家なく、家に無学の者なきを期する学校令、教育令の発布はこうした動きを全国に巻起こしたのであろう。廊下に半円、円形のステンドグラスがはめ込まれ、校舎中央部にある八角形の塔「太鼓楼」で太鼓により時を告げた。太鼓楼天井には五大陸各地の主要都市の方向が示され、山村の子供たちに地球的規模の視野を持たせようとした明治の新思潮を偲ぶことが出来る。

私がこの地の高等学校を卒業した昭和 37 年ごろまでは、旧中込小学校は役場・市役所の一部として使われ、文化財・歴史的価値の認識は乏しかった。小学校内には当時の学習記録等が保存されるとともに近代史に活躍した卒業生として伯母丸岡秀子（産業組合運動の指導者千国興幸太郎氏の下で農民の地位向上に、平塚らいてう女史等の下で婦人参政権運動に参画）が紹介されており、私にとっても懐かしい伯母との対面であった。旧中込小学校をご案内頂いた保存会会長小林濱次郎氏に感謝申し上げたい。

竜岡城五稜郭は、函館五稜郭とともに日本に二つしかない洋風建築様式による江戸末期の築城である。三河松平家に系譜を持つ田口藩主大給恒の築城であるが、明治維新により未完成に終わっている。大給は、蘭学を学び、明治以降、賞勲制度、日本赤十字社創設に加わった。桜の季節は特に絶景、私の幼少期には、堀はスケート場として使われていた記憶がある。

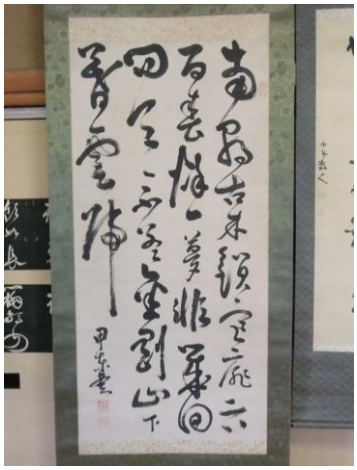
５．（橘倉酒蔵訪問＆先遣遺墨の記）

私の実家「橘倉酒造」は、多くの日本酒の蔵元と同じように江戸期に起源をもつ。最古の記録文書には、元禄直前、延宝 5 年（1675 年）に年貢米の余剰をもって酒株（当時の酒造製造免許）を得たことが記されている。屋号の橘倉は、源平藤橘の橘諸兄に由来すると伝えられているが実証されたものはない。イデの姓は、京都以西は「井手」が多く以東は「井出」が多い。井手姓を持つ知人と話した際、井手の姓も橘諸兄に起源を有するとの話を伺ったことがあり、何らかの繋がりを類推することが出来る。

明治初年自由民権運動で全国遊説した中江兆民が一夜をわが家で過ごし、「民為重（民重きを為す）」を揮毫していった。この書は以来茶の間の壁に掲げられ、私はその所以をなき祖父から幾度となく聞かされたものである。自由民権運動に心酔した曽祖

父、祖父、その流れの中で、明治以降の内外の政治家・文人の墨蹟が残され、集められ、今回、兆民以外に孫文、金玉均，三条実美、大久保利通、石橋湛山、松村謙三等の書をご覧いただいた。

三條実美の書



大久保利通（甲東）の書

掛け軸の大分部は、漢文、漢詩からなり、如何に日本文化が大陸文化と密接に結びついていたかを改めて痛感する。同時にその解読が極めて困難な私たちの世代の実情に鑑み、これを機会に漢籍解読の必要性を認識した次第である。

当日は現物をお見せ出来なかったので、手始めに、伊藤博文が明治 22 年紀元節に書いた明治憲法制定に関する以下の一文を、漢語辞典「大漢語林」を頼りに私なりの解釈を披露したい。ここに明治憲法のすべてが語られているように思われる。

「万機献替廿余年　典憲編成奏御前　放眼泰西明得失　馳心上世極精研　中興大業縄天祖　開国宏膜賀昔賢　更始偕民至尊志千秋胆仰帝威宣」。（20 余年のあらゆる機会を献じ　ここに憲法編成を御前に奏する眼を西洋に放ち得失を明らかにする　心を上世に馳せ精しく研究する　大業を中興し天祖を正す　国を開き広く昔からの賢人にひざまずき慶ぶ　更に民衆が皆尊い志に至ることが始まり　永久に帝威の広まりを仰ぐ)。

ここには、岩倉使節団の多様な観察、市民社会としての欧米近代の普遍性が偏向し、極東の一国における天皇制という枠に留まってしまった限界を如実に観察することが出来る。しかし、憲法制定のプロセスにおいて植木枝盛の憲法草案を始め、使節団同行留学生中江兆民の民権思想等より民主的性格の憲法草案等がなかったわけではない。憲法制定に際しその中身を知らず祝賀に走る世上、国民の姿をベルツはその日記の中で皮肉っている。

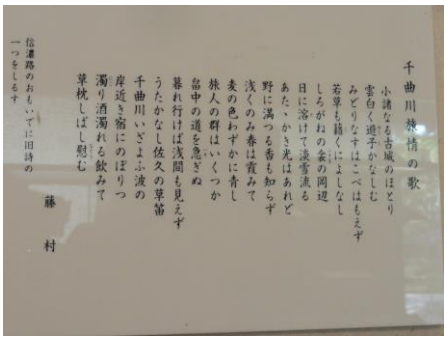
戦後憲法を押し付け憲法として弾劾し、戦後日本の新しい展開を「孤立と軽蔑の対象になったとして」自主憲法制定を唱える者は、こうした未完の明治維新の歴史と明治憲法下でアジア支配、戦争に走った失敗の教訓を学び取らなければならない。

長野の旅

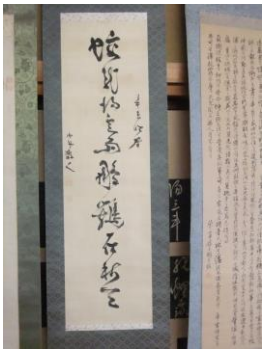
梶　春治

２０１３年５月１５日～１６日一泊二日の米欧亜回覧の会主催、長野県松代　小諸　佐久　歴史を訪ねる旅に出掛けました。長野駅に１１時０５分現地集合し　長野電鉄バスで２０分位走り　竹風堂で季節外れの、栗ご飯と鱒の甘露煮を美味しく戴き、遅れて到着した泉代表と合流、真田１０万石の城下町松代を見学　先ず佐久間象山神社を訪れました。歴史に名前を残した人物は神になり祀られる　しかし　社殿内には　刀　鏡　勾玉が祀られてあり、人物像や人物画は見た事が在りません、外には銅像等は存在しています、佐久間象山の名前は知ってましたが、どの様な活躍をしたのか、知りませんでした。ボランテアで観光案内人、佐久間さんの説明で、吉田松陰、勝海舟、坂本龍馬、山本覚馬、河井継之助、加藤弘之、等に影響を与えました。安政元年（１８５４）門人である吉田松陰の米国密航未遂事件に連座し、生まれ故郷の松代に蟄居を命じられた。文久２年（１８６２）まで８年間、この時にオランダの文献等を参考に電気治療器、等々多くの発明品が象山記念館に展示されていました。思想家、発明家、として活躍、蟄居を解かれ、将軍家茂の命により元治元年（１８６４）に上洛。公武合体、開国左幕を説くなどの活躍中に三条木屋町で尊王攘夷派に暗殺された。享年５４歳であった。象山先生の墓がある日蓮宗の、蓮乗寺を訪れてから、つぎに藩士の子弟の学問、武芸を奨励するためにつくられた、文武学校へ（１８５５）安政２年開校、幕末期の儒学中心の藩校から近代的学校建築への過渡期の建物です、そのため、孔子廟はつくられませんでした。文学所、御役所、教室２棟(東序，西序）、剣術所、柔術所、槍術所、弓術所では２８m先の的に和弓の練習で女性の方が見事に的に当てましたおもわず拍手。バスで小諸まで移動、懐古園、小諸記念義塾記念館、藤村記念館、小山敬三美術館（浅間山新雪）等の素晴らしい作品。日中晴天で暑かったが、（気温３０℃）夕方から急に気温が下がり寒くなりました。宿は中棚荘、斜面に建っている二階建ての木造建築で千曲川を５００m先に見ることができる宿です。

島崎藤村も　「千曲川旅情の詩」の一節にある、千曲川いざよう波の岸近き宿にのぼりて濁り酒濁れる飲みて･･･の岸辺の宿は中棚荘を詠ったものと



のこと。おもむきのある、落ち着いた感じの部屋、浴衣に着替えて少し急な斜面を上がり温泉風呂へ、入口近くには冷水（地下６００ｍから汲み上げた）を飲み、初恋林檎風呂、樹林の湯、観月の湯、露天風呂、泉質は　弱アルカリ性で（美人の湯）に浸かり今日の疲れをとり、宴会場へ美味しい料理、橘倉酒倉の酒、ワイン、等をいただきながら、ブンブンミーテイング、楽しく有意義なひと時でした。１６日は少し早めに起き風呂に入り、小野さんの勧めで千曲川まで散歩（浴衣と雪駄の出で立ち）鴨が数十羽ゆったりと川面を泳いでいました。藤村もたびたび訪れた、水明楼に寄り（小諸義塾塾長　木村熊二の書斎）千曲川を眺めましたが良く見えませんでした。朝食会場へ麦とろ食（貧乏人は麦を食えと云った池田勇人総理を思い出しました）美味しくいただき、おかわりをし、山羊の乳をのみました。中棚荘を出発して旧中込学校へ、山田哲司さんと合流、綺麗なふじの花が咲く校庭、樹齢が１００年を越えているそうで、此の学校は身分に関係なく学ぶ事が出来、授業料も掛かり学資金取り立て簿も在り、父兄が毎月お金を支払うのは大変だったと思いました。次に龍岡城五稜郭を訪れ星の形をした地形を歩いてみて、（日本に函館と龍岡の二カ所しか無い五稜郭）お昼は鯉料理で有名な老舗、割烹、花月でいただき、ピンコロ地蔵にもお参りして、井出亜夫先生の実家、橘倉酒蔵、伝統と革新の酒蔵へ、今回の旅で一番楽しみにしていたところです。１６９６年（元禄９年）創業３１７年　気が遠くなるぐらい歴史のある名門酒蔵の家、１８代当主、井出民生社長、皆さんの出迎えを受け、特別室に案内され井出家に残るお宝見せて貰い感動しました。



海舟の書

三条実実、勝海舟、中江兆民、孫文、他多数の書等、井出亜夫先生と奥様が先乗りされ私たちに見せるため準備してくれました。敷地の中を川が流れ庭には牡丹の花が咲き、酒蔵を１９代当主を継ぐ甥に案内してもらい、お酒の製造工程を説明して頂き見学することができました。店では試飲会、美味しい酒の中から夏吟醸と木箱入大吟醸を買い求め宅急便でおくりました。今回の楽しい旅は井出亜夫先生、小野博正様の御尽力のおかげです、有り難う御座いました。

松代・小諸・佐久の旅に想う

金本君子

2013 年 5 月 15 日と 16 日　風薫る 5 月とはいえないほどの暑い気候でしたが、とても有意義で楽しい旅行でした。松代は佐久間象山の出身地、私が小学校 2 年生のとき、ショウザンかゾウザンかの議論がなされたことを思い出します。因みに大東亞戦争が始まったのは4年生の12月8日でした。その象山の記念館で彼が別の時代に生を受けていたらどんな生涯を送った人だろうと思いました。裃を着て馬に乗った彼、勇ましい勤皇の志士といわれた彼、それなのに私が特に印象に残ったのはバックルでした.維新を超えること、超えねばならないと思った人たちの考えていたことを知らせてくれるものでした。

この旅行で二つの学校跡を見学しました。松代の文武学校と 16 日に見学した旧中込学校でした。文武学校は 1855 年に開校したのですが明治維新と共に廃校となり、その後紆余曲折を経て建物は再び学校となって昭和初期まで使われたそうです。藩校で合った時は文学や武芸のほか、西洋の軍学まで教えられたと言われています。私もあちらこちら見学をしましたが学校跡を見学したのは始めてでした。そして、その保存状態のよさに感激しました。長野県人なればこそでした。

次に小諸ですが私にとっては特別な場所でした。父の兄が医者として 1 人前になってから小諸に病院を建て開業しました。大正の終わりか昭和の初めかと思います。今も孫とひ孫が引き継いでいます。それで私は小さい時から何度も訪れております。なんとそれがこのたび大変お世話になりました井出さんのお母様の実家のお隣でした。昭和20年3月9日東京下町が空襲によって丸焼けになりました。父母は女の子に傷を付けられないとたった一人でこの家に疎開させられました。とても大事にしてもらい、学校も山の上の方へ楽しく通っていましたが、何か分からない寂しさがありました。そんな時、たった一人で通ったのが懐古園でした。久しぶりに訪ねた懐古園はあまりにもきれいに整備されているのに驚きました。

当時は町の側には 3 つの山が見え左の山には藤村の破戒の舞台といわれた村、右には鍋島旧公爵邸が見えましたが、このたびはかすんでいたのと高い建物もあって見えませんでした。
逆の側には山間を千曲川が静かに流れていました。見晴台の位置関係もあるのでしょうが家もあり、思ったほどの風景は見られませんでした。60 数年が過ぎたのですから。

次の日、バスで佐久へそして中込へと参りました。さすがに 5 月、盆地を囲む丘陵の緑は本当に美しかったです。井出さんが佐久病院を教えてくださいました。昨今、長野県は沖縄県を抜いて日本一の長寿県となりました。大分前でしたが、東大出の望月先生が赴任され村人が短命であったり、

脳卒中などの成人病で不自由になるのを見て、塩分の取りすぎに着目され大変な努力をなさったと聞いております。当時は予防医学もよくは認められておらず学会からも冷ややかな目もあったようで“あれは共産党”とまでいわれたこともあったようです。それが後を継がれた方たち、そして県民その他の努力によって快挙をなしとげられました。出発前から、是非建物だけでもと思っておりましたので井出さんに感謝いたしました。

次に旧中込学校ですが、こんなに愛らしく美しく感動的な史跡をみたことがあったでしょうか。いただいたパンフレットに詳しくそのいきさつは載っておりますが明治維新後、明治 5 年に学制が発布されたのですが、明治 8 年にこの西洋建築様式の学校が村民協議のうえ建てられました。そして、その費用に村内有志の募金がありました。失礼ながらこの地にこの美しい建築、学校が存在することが不思議におもわれました。この地において教育に対する関心の深さが感じられましたがそれにしてもなんともおしゃれな学校であり、建築物でした。何か佐久間象山のバックルに通じるものがありました。

次に龍岡城五稜郭を見学しまた驚きました。函館以外に五稜郭はここだけのようです。そして建てられたのがなんと 1867 年日本最後の城郭建築と聞いて驚きました。お堀の外側を回りましたがこの角度は不思議な美しさがありました。

最後に井出さんの御実家橘蔵酒造に御案内いただきました。美しいお庭、たくさんの家宝をお見せくださり、そして何より、御家族の心温まるおもてなしに心より感謝もうしあげます。

さて最後に気になったことがあります。それはこの盆地、平野の広さと田んぼ区画の小ささでした。囲む山々は遠くにあり、今まで見た小さな田んぼは美しすぎる棚田が多かったのですがこんな広い、平らな土地にしては田んぼは狭すぎるのではないでしょうか。日本の国のためにどうにかできないかと思いました。日本の農家は戦後、農地解放と言う険しい山を登ってきたことも分かりますし、またこの地に限ったことではありませんが、維新の後、こんな美しい学校を自分たちの力で建て、日本一長寿の県を作った長野県に期待してしまいました。

そんなことはともかく、たった 2 日間でしたが、とても有意義なユニークな楽しい旅でした。愛する御出身地をさりげなく丁寧に御案内くださった井出さんに心より感謝申し上げます。毎年、行かない年はないほど行っております長野県のイメージが変わりました。それはとても嬉しいことでした。また、常に細部にあたり、総てにお骨折りくださった小野さん　また、このような会を作り育ててくださいました泉さんに心より感謝もうしあげます。

皆様ありがとうございました。

信州歴史ツアーの随想

高倉宣夫（豊橋）

1．初日の松代の象山神社、象山記念館の見学で、佐久間象山に関する遺品が豊富にあることに感心しました。今度は自分でたっぷり時間をとって、ここに来たいものだと思った次第であります。案内人の佐久間氏の詳細な知識にも感銘を受けましたが、回覧の会の方々の造詣の深い知識にも大いに啓発されたことでした。象山神社は、大正の末年頃に地元の篤志家たちの寄付を得て、佐久間象山を神として祭るため設立されたとのこと。豊橋の隣に位置する田原藩の家老・渡辺崋山とも親交があったこと等、吉田松陰に与えた影響などを勘案するともっと深く資料を集めたいと思いました。

2．次に小諸市の懐古園は、千曲川に沿った不思議な地形を利用した城郭の跡にいくつかの歴史史跡を集めた歴史の宝庫ともいうべき処かと思います。小諸義塾記念館や藤村記念館、また松代の文武学校、2 日目の中込学校など信州（長野県）は学校の建設や子弟の教育に熱心な土地柄であることを痛感します。懐古園内に立つ小諸出身の小山敬三美術館も、ご本人が私費を投じて建物を建設し、内部の絵画を寄贈して美術館を完成させたという長野県人は素晴らしいことをする見本のような存在であると思います。

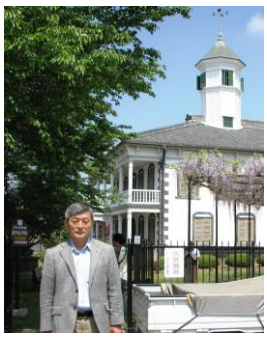
3．2 日目の龍岡城五稜郭は、岡崎藩の支藩である奥殿藩が、所領の飛び地であるこの地に、星型の洋式城郭を幕末のギリギリのところで作ろうとして、未完成に終わった夢の跡で、いまは田口小学校が建っている。一度は訪れて、幕末を感じて欲しいところです。

4．最後に、今回のツアーを企画して頂いた井出亜夫氏の生まれ育った橘倉酒造にて収蔵品と酒造設備を見学させていただいて感謝です。佐久地方の名士である井出家に伝わる幕末から明治・大正・昭和にかけての書画のコレクションの一部を拝見させていただきありがとうございました。三木内閣の官房長官を務められた井出一太郎氏のご子息や孫の世代が、立派に活躍されている様子に私も同慶のいたりでありました。一本買って帰った大吟醸も、大変美味しくいただきました。

龍岡城五稜郭の堀

信州行に寄せて

大森　東亜



信州行は予想以上に充実した旅であった。いくつか印象に残ったことを思いつくまま記させていただくことにしたい。

その一つが、元禄以来三百年の信州佐久の旧家、井出家の奥座敷に掲額されていた中江兆民の書、「民為重」を拝見させてもらったことである。書には嗜みのない私であるが、兆民の書を目にして遥々この地に来れたことを嬉しく思う。お聞きしたところ先代の方が自由民権の政治活動に関われ、この地を訪れた兆民に揮毫してもらった由。政治家を輩出している井出家の政治的志の一端を感じさせられた。

さてその後、台湾出身の知人に書の写真をみせたところ、孟子に「民為貴、君為輕、社稷次之」ということばがあると教えてもらう。兆民は「民為重」と、孟子の「貴」を「重」に代えて墨書している。兆民にその真意を聞いてみる必要があるが、後に続く「君為輕」を踏まえると、「重」と表現した方が、対照の妙があると考えたのかも知れない。いずれにしろ孟子も兆民も意図するところは変わらないと思われる。

ちなみに新釈漢文大系『孟子』（内野熊一郎、1962 年　明治書院）によれば、

孟子曰、民為貴、社稷次之、君為輕。是故得乎丘民而為天子、得乎天子為諸侯、得乎諸侯為大夫。諸侯危社稷、則變置。犠牲既成、粢盛既潔。祭祀以時。然而旱乾水溢、則變置社稷。

通釈では、孟子が言う、「国家にとっては民を一番貴いものとし、土地や穀物の神をその次に貴いものとし、国君を一番軽いものとする。そういうわけゆえ、民に喜ばれてはじめて天子となれるのであり、その天子に喜ばれて諸侯となり、その諸侯に喜ばれて大夫となれるのである。もし諸侯が無道な事をし、社稷を危くするようなことがあれば、社稷のためにはやむを得ず、その無道の君を廃して、賢君を更めてたてることをする。また、社稷に供えるいけにえが十分に肥えふとり、器にもった黍稷が十分清潔に、祭祀も時をもって行われるにかかわらず、ひでりや大水があるようならば、民のために、かかる社稷の配神は、これをあらためかえることをするのである。」と。

※「社稷」の「社」は土地の神、「稷」は穀物の神。国を建てる時はまずこれを祀るのである。国家のことを「社稷」ともいう。

そして、注釈者、内野は余説において、この孟子の言は、孟子の名言であり、特に中国的考え方である、革命や民意尊重などを提唱してきた点で不朽の大文字であると述べるとともに、中国の民本思想の本質を

明らかにしたものとして重要だと指摘。この孟子の思想は、現在の中国の立国の基盤となっているはずであるが、理想と実際とはかなり隔たりがあると見るのは私だけだろうか。この孟子のことばを日本の現状に照らして見たとき、中国の現在とどれほどの違いがあるのか、改めて考えさせられる。さらに時代を遡り、江戸期の朱子学支配の時代と明治期の天皇制国家時代を生きた中江兆民が書にこめた思いはどうであったのか、感慨を新たにさせられた。

なお、井出家の奥座敷には兆民の書とともに、孫文の書「大同」が掲額されていた。由緒は聞き損ねたが、孫文が書を寄せて以来、中国と日本の関係がどのような関係にあったのか、孫文の思いを日本はどのように受けとめてきたのか、「大同」の意味するところはかなり深いと思わせられた。

印象に残った二つ目は、信州の学塾についてである。小諸城では水の手展望台や天守台跡から遥かに千曲川を望む。またヤマツツジの鮮やかな咲きぶりに目を愉しませた古城の一隅に、小諸義塾記念館が静かに佇んでいた。小諸義塾は明治 26 年、私塾として耳取町に開校し、明治 29 年、現在の記念館所在地に町の補助金を得て塾舎が建築され、中等教育を担ったが、明治 39 年をもって閉校。アメリカ帰りの塾長、木村熊二はキリスト教をバックボーンに自由主義的教育を質実に進めてきたが、日露戦役に伴う国家的教育制度に阻まれ、閉校を余儀なくされたと伝える。教師陣には、若き島崎藤村、東京物理学校創立者の一人、鮫島晋、水彩画の先駆者、丸山晩霞などが連ねる。

佐久では旧中込学校を地元のガイド、小林濱治郎氏の案内で見学。校舎建築に伴う寄付金「取立帳」などの建築関係諸史料、明治, 大正、昭和にわたる各教科の教科書、教材等の展示を通して初等教育の実態を具に体感させられる。先人たちの汗と情熱の結晶である貴重な建物が国史跡の指定をうけ、子どもたちが雑巾がけするなど地元で大切に保存されてきたことを知らされる。建設と建物保存の経緯、寄付金等の説明はガイドの小林氏がまとめられた「小さな村の大いなる挑戦、重要文化財・旧中込学校建設について」が詳しい。

さらに佐久間象山ゆかりの松代藩・文武学校を見学。藩校としてよく保存されていたが、象山の進言があったにも関わらず設置は遅く、設立は安政２年（1855)。それまで藩校がなかった訳ではなく、宝暦８年（1758)に稽古所がおかれたものの中絶し、文化３年（1806）に小規模ながら学問所として再開されたが、本格的な藩校として整備されたのが文武学校であった。

印象に残った三つ目は、元禄期からの橘倉酒造の酒造りのもととなっている水である。地下から滔々と流れ出ている清冽な水を賞味し佐久の初夏を満喫。

てっきり東北産と思っていた「北国の春」が実は信州佐久でつくられ、唱のなかの「お酒」は橘倉酒造のものではというお話しは一寸した土産話である。（終）

信州（小諸・佐久）の旅を回顧して

－東日本被災地と重ね合わせて－

堀江　興

まえがき

今年前半は国内・海外合わせて３回の旅行をした。去年から歯のトラブルの為、どの旅も難儀であった。しかしこれらの旅は、自分自身の知見等を深める為に必要であった。本論ではそのうち国内２件について記述したい。

１・東日本被災地への旅

－余りにも悲惨な状況－

去年秋、東北被災地の学術調査が予定されていたが、現地の多忙な復興事業に迷惑をかけるおそれがある為、直前になって無期延期となった。このため、私は今年４月下旬、仙台での用件を終えたあと、２日間岩手・宮城両県の被災地とりわけ石巻、気仙沼、陸前高田を中心に鉄道やバスを乗り継ぎながら視察調査をした。現地は未だに大量の残骸物が残され、報道等で想像していた以上に復興事業は進展していなかった。

被災者との面談では、思わず涙を禁じ得なかった。テレビニュースでは災害のむごたらしさを映像として流さなかったが（外国の TV 報道はかなり生々しかったらしい)、その時のすさまじさ、むごたらしさを今は物静かに聞かせてくれたが、震災当日の大津波や火災で多くの人が家・財産・家族を失い、雨や雪の降りしきる寒さの中で激しく慟哭したという。米軍による「トモダチ」作戦、駐日アメリカ大使の複数回の隠密視察と見舞い、自衛隊による救援活動、多くのボランティアによる献身的助力には皆が感謝の念を持っていた。私が訪問した２日間は好天気で、遅い春の桜吹雪が至る所でその美しさを見せていた。大地震・大津波さえなかったら、のどかな素朴な漁村で住民生活も平穏であったろうに。

将来、日本の何処かを襲うであろう巨大地震や大津波による国土の損壊、人の生命や財産の喪失を我々は可能な限り最小限にとどめるよう早急に対策を実現していかなければならないことは言うまでもない。

私は帰途地元経済の一助にもと思い、僅かながらいろいろ地元特産品を購入、痛ましい災害の強い印象を心に留めて帰路に着いた。

２．信州（小諸・佐久）の旅

－歴史・文化・風土を求めて－

好天気に恵まれた信州の旅は、東北の被災地とは違い、余りにものどかな日本の原風景や文化・風土が展開され、東北の被災地の強い印象が残っていた私にとって平和な良い所だと実感した。５月１５日から２日間の皆との旅は楽しいものであった。

第１日目松代の佐久間象山記念館等で、改めて象山の多くの遺徳を知った。象山による「海防八策」上書によって時の幕府が国策の大転換を行ったことにより、結果的に日本が海外諸国から攻撃されるのを防いだことを知った。また吉田松陰のアメリカ密航の罪に連座して安政元年（1854）から文久２年（1862）の間投獄・蟄居の身にあったが、この体験が象山の人間性をさらに

高めたといえよう。この体験に先立って象山が３１才の天保１２年（1841）に作った「望岳賦」は、若い象山が富士山の雄大さや崇高さに心打たれて将来に向って青年としての心意気に燃えさまざまな困難に立ち向かっていたこと、また蟄居の身であった万延元年（1860）には「桜賦」を詠んでいるが、５０才という円熟期にあった象山が人生の生き方を深く考えまた国の行く末を案じていた象山の円熟した人柄を知ることが出来た。

象山は元治元年（1864）７月京都で攘夷派に襲われ、５４才で落命したことが誠に惜しまれる。しかし象山が暗殺されてからわずか３日後に知行・屋敷を召し上げられ、佐久間家は断絶したが、江戸時代の掟の厳しさを感じさせる。暗殺から４年後の明治元年（1868）まで生きていたら象山よりも１２才若い勝海舟や、さらに１２才若い暗殺された坂本龍馬（３人ともひつじ年）共々、生き残っていたら明治という新しい時代を、岩倉具視、大久保利通、西郷隆盛他多くの長州藩・鹿児島藩・土佐藩等の面々とどのような明治の日本を作ったのか、私の興味は深まるばかりであった。象山神社周辺は整然と家が建ち並び、黒く光る独特の甍が美しさを醸しだしていた。

第１日目後半の小諸懐古園は、往時と違ってすっかり人工的に整備され、少しがっかりもした。島崎藤村記念館で、藤村の年表を見たが藤村は大正２年（1913）、４１才の時に海路を使ってフランスに渡り、パリ滞在中「平和の巴里」を書いていることを知った。しかし、藤村がフランスを旅したのは実は妻フユ子を亡くした後、姪こま子との深い関係を清算する為友人のすすめによる逃避行であったことを、私は今回の旅の後で物の本で知った。藤村は帰国後再び姪とのよりが戻って、友人の助力で別れている。日頃われわれが目にする藤村の謹厳実直そうな肖像写真から受ける印象とは違い、その面では藤村は女性との関係で意志薄弱なところがあったのではないかと私は思う。藤村が著した２８２ページの「平和の巴里」を読むと、藤村はパリの生活で多くの文人達との交流を楽しんでいる。またパリのマロニエや美しさ、５月すずらんの季節になると男女共その花を胸に飾っていることを描いている（今でもその習慣は残っている）。藤村のパリの生活はかなり精神的に充実したものだったことを「平和な巴里」から読み取ることが出来たが、内容は案外つまらないというのが私の読後感である。

私は懐古園の「水の手展望台」に行ったが、そこから見た千曲川の風景には落胆した。なぜなら展望台左手の千曲川にドラム缶を逆さに並べたようなダム（堰堤）がつくられており、周りの風景との違和感を私は強く感じた。おそらく建設当時は周りの風景にも配慮して堤体を建造したと考えられるが、今日的風景概念にはそぐわないと思った。もう少し懐古園からは見えない上流側につくっても良かったのではないのだろうかと思った。千曲川の水流も少なく私は寂しく感じた。藤村の「千曲川旅情のうた（一）（二）」とは程遠いものに変わってしまっているというのが私の感想である。

藤村は２８才の時、小諸義塾で木村熊二塾長の招きで、明治３２年（1899）から国語と英語を教えていたが、７年にわたる生活の中で宿泊していた「中棚荘」に私達一

行も一夜を過ごした。夜の懇談会は楽しかったが、二次会は歯痛の為欠席した。沢山のリンゴが浮かぶ夜の温泉は風情があり、また翌朝の小鳥のさえずりを聞きながら再び湯に浸る醍醐味を堪能した。

翌日の朝食は、私の体調と歯痛から食べやすい形に料理していただき心遣いが有難かった。（前日の夕食は噛まずに丸呑みしたり食べ残してしまっていた）。

２日目は、かねてから旅をしてみたいと思っていた「佐久」であった。佐久では、明治６年（1873）成知学校が創立され地元有志の寄付等で校舎が完成、明治９年（1876）、中込学校として発足したが、モダンな趣のある校舎である。大きく成長した藤棚の花は見事であった。

旧中込学校の八角形の太鼓楼の天井画には、方位毎に世界の主要都市や日本の都市名が記されているのを見て教諭の指導に、尊敬の念を感じた。太鼓楼の時を告げる鐘の音は周囲の農村生活を精神的に豊かなものに感じさせたであろう。またこの旧中込学校の教師の厳しい教育を受けた卒業生達はその後大志を抱いて社会で活躍したことであろうと思った。私は自と良く知られた「兎、追ひし彼の山」で始まる「故郷」と「仰げば尊し」の歌詞を思い出していた。日本を思い世界を思い故郷に思いを馳せて働いた人達は今は故人となっているが、旧中込中学校内の展示物から私は先人の生きた道を感じ取った。

私はこの太鼓楼から、はるかに見える山脈の上に浮かぶ一朶の白雲を見て「何と平和な佐久だろう」と思った。そしてこの時東北の被災地の悲惨な情景も思い出し対比していた。

第２日目後半、「橘倉酒造」２階に展示されている日本を動かした著名人の数々の遺墨を全部解読することは叶わなかったが、井出家はこれらの収集したものを大切に保存・展示され先人の偉業が伝わってくるものがあった。その感動もあり日本酒を数本購入、帰宅後今回の旅の数々の思い出を込めて味わった酒は格別であった。良い旅であった。

あとがき

本稿では衝撃的な東北大震災被災地を見たあとの平穏な信州（小諸・佐久）の旅であったので、比較の旅の感想を記した。この旅の後、５月下旬から６月下旬まで３２日間にわたるヨーロッパ７ヶ国の都市研究に観光を兼ねた旅行に出発した。本会「実記を読む会」で担当した地中海のマルタも訪ね、第一次世界大戦時、魚雷攻撃を受け沈没した巡洋艦「榊」の５９人の兵士の「日本海軍慰霊碑」を訪ね参拝した。旅の前半は好調であったが、後半フランスで重い「肺炎」に罹り、パリの病院で１０日間入院・治療を受けてようやく帰国した。このためフランスやイギリスの予定はすべてキャンセルせざるを得ず残念だった。

東北、信濃、ヨーロッパの地方都市との対比をしたかったが、今回はかなわなかった。

おわりに、信州の２日間の旅を実りあるものにして下さった幹事や有志の皆様に心から御礼申し上げたい。

幕末・明治を偲ぶ信州の旅

塚本　弘

異相の人　佐久間象山

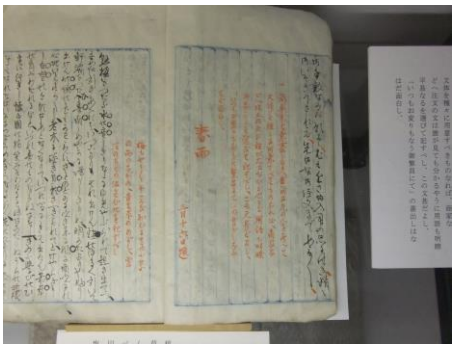
昼下がりの松代は、人の往来も少なく、のんびりした風情のある城下町だった。そんなゆったりとした気分は、佐久間象山の肖像画を見たとたんに、吹っ飛んでしまった。志（こころざし）が顔に表れるとは、正にこのようなことをいうのだろう。江戸で象山が学んだ佐藤一斎は、「言志四録」で「志気を剣のようにせよ」と述べている。こうした侍としての自覚に加え、藩主が海防係りを命じられたのを契機に、洋学を学んだことが、ますます象山の危機意識を高めたものと思われる。ただ、このように気迫に満ちあふれた表情の象山だが、実際の考え方は極めて現実的であった。清国が外国に侵略されたことも伝わっており、日本としても、早急に外国に対する海防の備えを整えるべきであり、そのためには、何よりも外国の科学技術を取り入れることが必要との認識であった。象山記念館には電信機、写真機など象山先生が手掛けた実際の器具が展示されており、単に、開国論を唱えるだけではなく、具体的なモノづくりに励まれたことも印象的であった。吉田松陰、小林虎三郎ら多くの俊英に多大な影響を与えた象山は、残念ながら、京都で過激な攘夷論者に斬殺されてしまった。当時の京都は、開国か、攘夷か、尊王か、佐幕かで、互いに殺し合うという殺伐たる雰囲気であった。いわば、テロリストが横行していた時代ともいえよう。その後、幾多の試練を経て、我が国は今日の平和と繁栄を享受している。しかし、今後の日本を考える場合、外においては、中国や北朝鮮からの脅威、内においては、少子高齢化社会の到来など多くの課題に直面している。象山先生が、今の時代に生きておられたなら、やはり裂迫の気合いで、我が国のあるべき方向を論じられたのではなかろうか。先生の故郷の松代までやって来て、異相の肖像画に触れたおかげで、御本人に出会えたような気がするとともに、改めて、気持ちの引き締まる思いがした。

教育立県の信州

明治 8 年に建てられた旧中込学校で印象的だったのは、モダンな欧風の建物もさることながら、この建設に寄附した村民の一戸一戸の金額が記帳されていることだった。明治政府は明治 5 年（1872 年）に学制公布を行ったが、小学校の建設は、金もかかる

ので、地元の人々の支援なしには進まなかったことがよく分かった。子供の教育という地域の将来発展に不可欠な学校は、地域の力で作ろうという佐久の人々の心意気を感じた。
今日、地方分権などの議論が盛んに唱えられている。しかし、実際に、自分の住んでいる地域を自分達の力で発展させて行こうという意識は、明治の人々に比べるとかなり薄れてきているのではなかろうか。国や地方自治体という仕組みが発展してしまったために、何か、人任せになり過ぎてはいないだろうか。そんなことを考えさせられた。

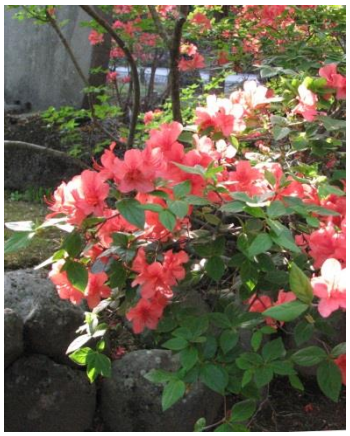
井出さんの御厚意でご実家の橘倉酒造の酒蔵を見せていただき、明治の偉人達の書も拝見した。何よりも中江兆民の「民重為」の書が印象的だった。一人一人の住民がまず自分で地域の発展のためにできるだけのことをする。中込学校の建設はその好例だ。そういう住民の考え方を尊重し、助長していくために、政治家も、住民のことを重く考えて、政策を遂行する。これこそ正に政治の要諦だ。小諸の「懐古園」では、島崎藤村が小学校の教師をしていたときの生徒に対する作文の添削が展示されていた。きれいな字で、しかも、その生徒を優しく励ますような心のこもった添削だった。藤村も「教育立県」信州の担い手だったと実感した。



藤村の朱筆

山間より千曲川を望む

文武学校の弓道場



洛陽の牡丹　　大場梅子

みすずかる信濃の国や麦の秋

緑さす象山先生騎乗なる

雲の峰天下にその名とどろかせ

涼しげに六文銭の的を射る

小諸なる古城のほとりつつじ燃ゆ

新緑の谷底あるく懐古園

草笛にふと耳澄ます千曲川

藤村のゆかりの宿やあやめ咲く

ひさびさの再会うれし冷し酒

太平の眠りを覚ます蚊一匹

田水張る浅間山麓きらきらと

佐久に来てまづは喰さん洗鯉

良き酒をはぐくむ佐久の清水かな

十八代守りて酒蔵鯉のぼり

墨痕の気迫を伝へ牡丹咲く

洛陽の牡丹を咲かせ庭中に

お土産の夏吟醸のとどきをり

佐久の旅―草笛連想

山田哲司

今回の「佐久の旅」は、二日目の朝から皆さんとご一緒することになったが、たった一日とはいえ大変密度の濃い、収穫の多い旅であった。訪問した場所それぞれに感想はあるが、全旅程をとおして参加していないので、今回はその時々に感じたことを、とりとめなく思いつくまま藤村の詩にあやかり「草笛連想」として書き連ねることにした。

「中込学校」

幹事の井出さんと打ち合わせ、中込学校で 9 時過ぎに合流することになったので、6 時、東京駅発の新幹線に乗り、8 時に佐久平駅に到着した。中込は小海線で 4 駅ほど、列車を乗り継いでいくことも考えたが、早めに現地に着き、あたりを散策しようと思い、タクシーを拾って、直ちに中込に向かった。今や交通の激しい街中に建つ建物とのことだったが、明治の面影を残す中込学校はすぐ見つかった。しばし、満開の藤の花を愛でながら付近を散歩、近所のお爺さんからこの地の話題を聞いたり、事務の女性から学校の由来などを伺っているうちに、時間はすぐに過ぎてしまった。バスで到着された皆さんと合流して、早速中込学校の見学をした。明治時代の教科書、机に椅子、オルガンなど教育県長野の原点を見、また鼓楼の天井には、世界の主要都市の方向が記されていて、明治の人たちの海外への眼差しを感じることが出来た。

「井出家及び橘倉酒造」

―野火焼不尽　春風吹又生

さて、午後からは私にとっては今回の旅のクライマックス、井出家秘蔵の、数多の書のコレクションを拝見した。佐久間象山をはじめ、政治家の中で、書家としても評価の高い副島種臣（蒼海）、犬養木堂、何か頼りないお公家さんと思われた三条実美の堂々とした楷書、流麗ながらどこか気負いが見える大久保利通、繊細で柔らかな書の勝海舟、伊藤博文、木戸孝允、浜口雄幸、朴訥ながら飄々とした田中正造など、多士済々の書が並び、目を奪うばかりであった。

斉藤実はこれらの政治家の中ではやや異色の存在である。斉藤は海軍提督であったが、政治家に転じた後も穏健にして文治派（海軍内では条約派、英米派）であったといわれ、書もまた温厚そのもののように感ぜられた。その書を見ているうちに、同じ海軍の提督、山梨勝之進の言葉を思い出した。斉藤は 2・2・6 事件の折、暗殺されるが、山梨はその頃、海軍を退役し、学習院の院長に就任したばかり、海軍年次では 19 年ほど後輩に当たるが、海軍内では文治派の流れを継承する一人と目されていた。その山梨が、終戦前、東京が焼け野原になったとき、終戦工作を内々進めていた現役の

高木提督を、白楽天の詩を引用して励ましたという。「賦得古原草送別」と題するその詩は、白楽天が若年の頃の五言律詩で、下記のとおり。5・6句目の対句は、杜甫の詩「春望」の「国破山河在　城春草木深・・・」や、藤村の詩「小諸なる古城のほとり」に相通ずるものがあるが、山梨が引用したのは、野火焼不尽　春風吹又生の対句で、私もこの2句は大好きだ。「春望」も戦後我々の心に響くものがあったが、白楽天の句は、焼野原の東京を知る世代にはなお一段心に迫るものがある。

そこで、来客帳が回ってきたとき、「春風吹又生」と書かせていただいた。どのような事があろうと、佐久の地に毎年春風が吹き、草木が栄えることを願い、その思いを込めて・・・。

離離原上草　一歳一枯栄
野火焼不尽　春風吹又生
遠芳侵古道　晴翠接荒城
又送王孫去　萋萋満別情

応接間には、中江兆民と石橋湛山の二枚の扁額があった。兆民の書「民為重」は、「民を重きとなす」と読み、兆民が同家を訪ねた折に揮毫されたものと伺ったが、雄渾な筆づかいといい、書の意といい、良いものを拝見した。数多の政治家の書の中で特にこの二者の額を応接間に飾るのも井出家の政治と政治家に寄せる見識を示すものと感ぜられた。

奥の玄関や中庭の佇まいには旧家の風格が漂い、中国から到来した由緒ある牡丹が咲き乱れ、沢山に試飲させていただいた清酒の微醺もかさなり、まさに信濃の国の高い文化を満喫したとの思いでありました。

「日本のチロル」

井出さんによれば、佐久は日本のチロルだという。山に囲まれた山水の美しい盆地に位置し、地域として独自な文化を持つ土地柄は日本のチロルとも言えよう。

チロルといえば我々世代では横光利一の「旅愁」が思い出される。東西文明をその信奉者の言動に対比しつつ、パリに、美しいチロルの山々、氷河と山小屋を背景に、そして東京へと矢代と千鶴子のじれったいようなロマンスが展開され、そのロマンとチロルという言葉の響きに、いつの日にかヨーロッパを訪れる機会があれば、チロルに行きたいと念じていた若き日のことが懐かしい。それから幾年月、1967年ドイツ銀行の研修生として滞在していたドイツから、中古のフォルクスワーゲンに乗りチロルを目指した。矢代が「見たら悪いと」洒落のめしたミッテンヴァルトを経由して、首都インスブルックに到着、大都会の雰囲気にいささか拍子抜けであった。研修生の身分では、チロルの山の雰囲気を満喫する時間的、経済的余裕もなく、「旅愁」の香りを実感するのは無理な相談だったのかもしれない。横光がチロルを訪ねたのは、パリへの外遊が昭和 11 年の春から夏にかけてであったから、多分この間、小説の描写からは、パリにマロニエが咲いた後、初夏の頃かと思われる。

ところで、岩倉使節団がインスブルックを通ったのは 1873 年 5 月 8 日早朝、ミュンヘンからイタリアへの旅の途中に列車に乗って通過しただけであるが、久米はチロルの歴史と共に、車窓からのアルプスの景観も描写している。詳しくは「米欧回覧実

記」の 73 章冒頭部分に譲ろう。東西の比較文明論は当会のテーマの一つ、同じ場所を、時を隔てて、事情も背景も異なる人物が訪れ、それぞれの感慨、感想を抱くのもまた旅の面白さだろう。

そう言えば、井出家の門前には 2 本のマロニエの木が植えられていたが、マロニエといえば、花の都パリの代名詞、ここにもヨーロッパの香りがあると、花盛りの頃を想像しながら、記念写真に納まった。

「草枕連想」

話題を日本に戻そう。佐久のもう一つのロマンは藤村の「落梅集」 “小諸なる古城のほとり” の第 3 節ではなかろうか。

“暮れ行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む”

この 6 句もまた“佐久の旅” のロマンといえよう。

「草枕しばし慰む」の世界から、連想はまた飛躍するが・・・。

「草枕」といえば漱石、主人公が山道を歩きながら「智に働けば・・・」と考えたあと、雨にぬれてたどり着いた宿で、部屋に飾られた額を見ながら、黄檗の高泉和尚の字が、蒼勁でしかも雅馴と評するくだりがあるが、今回の旅から帰って幾日かして、上野の芸大美術館で開催中であった「漱石展」を、井出さんご夫妻とご一緒に見に行った折にこの書を発見した。調べてみると、蒼勁とは老熟のうちに力強さがある（白川、字通）、雅馴とは文章の字句が正しく穏当であること（大漢語林）だという。今回見せていただいた多くの書のうちこのような評を下しうるのは誰の書であろうか。私の眼力では到底評価し得ないし、そもそも書いてある文章の全文が読み下せないようでは、所詮無理な話である。もっとも、「書」は、書いてある文章・内容を理解することより、全体の調和、書の線を自らの目で鑑賞することこそ大切だとする専門家もいて、この世界は奥が深い。「書」は人なりと言われる所以かもしれないが、それにしても明治の文豪たち、政治家たちの漢文と書の素養には驚くばかりだ。

〈浜口雄幸（左）松方正義（右）の書〉

「旅の醍醐味」

今回の旅では一日目に、松代で佐久間象山に関する沢山の知見を得る機会を逸したこと、また“小諸なる古城のほとり” に佇むことなく、藤村の詩を実感することが叶わなかったことは返す返すも残念だった。

当会の歴史ツアーでは江戸・幕末のころ

に活躍した諸藩を訪ねる旅が多いが、その都度当時の諸藩の文化水準の高さに驚かされる。また、多彩な人材を輩出したのは、それぞれどのような歴史的背景があったのだろうか、興味は尽きない。

帰途の列車では、塚本弘さんとご一緒した。東京までの約 2 時間、時事問題を中心に語り合ったが、余韻冷めがたく、東京駅を見下ろすレストランで　さらに 8 時ごろまで歓談を楽しんだ。よき話し相手を得て、本当に充実した時間を持つことが出来たが、これも旅行会の醍醐味であり、付き合ってくださった塚本さんには御礼の言葉もない。これが今度の旅の有終の美を飾ることになった。

「最期に御礼」

最期になったが、このような密度の濃い旅行の企画・運営に当たられた幹事の井出さん小野さんに改めて御礼を申し上げます。井出さんには貴重な書をはじめ、すばらしいお住まい、酒蔵を見せて下さり、さらにご家族・親族ご一同で歓待してくださったこと、重ねて感謝申し上げます。

蛇足ながら、佐久土産について一言。帰途、佐久平駅でお土産にと求めた胡桃菓子（中越屋製菓　長寿・ぴんころ地蔵名物、黒ゴマと味噌の 2 種類あり）と信州蕎麦（信州生麺工房）は家族に好評でありました。どちらも「橘倉」のお酒に良く合います。

+ 長野県の伝統文化と

1980 年代のチリ社会と駐在生活

納家弘美

５月１５日に長野県（信州）の文化に触れるツアーに参加して 1980 年代に駐在していた時のチリの社会と似た処が有るように思い当時の生活を思い出しながら書いてみます。

中南米駐在員生活の始まりは東京オリンピックの 6 日前に出発した主人の元に行った 1 年半後から始まります。当時は渡航許可がなかなか下りず一人住まいが解消出来たのは 1966 年 5 月でした。最初の国のエル、サルバドルで長男を生み、ガテマラで次男を生み、パナマで末娘を生み育て通算 25 年と 6 か国の駐在員生活を過ごしました。日本文化に触れる機会の殆どない体験をして余りにも日本の事を知らない自分に驚いて米欧亜回覧の会に入れて頂いて早や１２年が過ぎています。いまだに電車の利用で戸惑いご迷惑をかける事がしばしばあります。

当初は日本の新聞、雑誌、ラジオ、テレビもなく食料品も日本の半分くらい有ればよい方で、言葉はスペイン語で食べ物はトウモロコシが主食で習慣の違う貧富の差のある国で無事に 3 人の子供を生み育てる事は大変なプレッシャーがありました。家では日本食を好む主人にパラパラ米を圧力鍋

で粘りを出して、お寿司なども作って工夫しました。
（1985年頃ビデオデッキが出来たお陰で少し日本のニュースが分かるようになりました）

1980年の8月に中学1年、小学4年、幼稚園年長の3人の子供を連れての4ヶ国目の駐在員家族としてチリに沢山の荷物を別送してニューヨーク経由で飛んで行きました。

上2人の男の子を連れての海外駐在は教育問題を指導する立場の人から大学受験はどうするか、日本人学校の無い国への帯同はあまり勧められないと指導されましたが、成長期の子供を父親なしで育てる事の方が問題ありと考え色々な日本の学校で使う物などを揃えて悩みながら旅立ちました。

お正月やお雛祭り、七五三等の行事をここは日本で無いのだと省略されクリスマスなどもクリスチャンの行事なのだから関係ないと言われ会社を年間6日位しか休まない父親との日々を過ごした事に子供達は何も言わなかったけれど行事の楽しさを体験していないと不満も起こらないのかも知れません。お誕生日祝いだけは毎週のように招待を受け、我が家でも行いご馳走とお菓子を貰う喜びは子供時代の楽しみだった事でしょう。アンデスの山でスキーをしたのも忘れられない思い出になっている筈です。

学校は帰国後の事を考えれば現地のスペイン語教育よりアメリカンスクールに入れるのがベストと考え入学案内を取りよせて驚きました。強いチリペソ（1ドル38ペソ）対日本円（1ドル250円）との関係で入学金と月謝で400万円程かかり又、生活費が高く家賃も2000ﾄﾞﾙ(50万円)と高く大変な時代で会社に借金をし、その返済に5年程苦しみました。

子供達はチリに行った当時は英語による初めての授業の為か精神的な負担が大きかったのでしょうか、お弁当を持ち帰ってくる日が1週間程続き心配しました。

日本で給食は工場の建て替え工事などがあり半年しか給食の体験が出来ないお弁当持参の生徒時代を過ごしております。幼稚園からチリで教育を受けた娘は親の給食運動に教師、父兄の賛意が少なく1度もその楽しみの体験が無いまま義務教育を卒業しております。

前回の駐在から帰国して2年半ほどで、やっと覚えた日本語を忘れさせない為に日本人補習校にも通わせ、母親が代用教員等も務めて当時の学友達の家族と苦労を分かち合った事で今も仲良く春と秋にチリ会を当番制で催し神奈川、埼玉、千葉、茨木、東京等お当番の近くの名所などに出かけて当時の苦労話や苦心して作った料理の話など気兼ねなく思い出話しを楽しんで居ります。

1982年4月に日本人学校が進出企業の努力で設立されたのを機会に、下2人は転校して中学3年生までの義務教育を無事に卒業させました。上級性になると帰国やアメリカンスクールに転校して行き友達の殆ど居なくなるのに日本語の過不足ない子に育てたく思い、転校させず寂しい時も有ったでしょうが良く頑張ったと思っています。次男は級友なし娘は1人の級友しか居ない

クラスでした。小中校生合わせても 30 名前後の転出入の良くある中を学校行事などに代表を務め、運動会等も奮闘し低学年生の面倒も見る責任ある行動の取れる中学生時代を過ごしております。

地域社会の活動に力を入れていた私は、勉強しなさい等とは一度も言えなかったけれど、自分達で自主的に勉強したようです。

派遣された日本人教師は当初は 4 人で多い時でも 7 名位で腹式授業が当たり前の学校でしたが幸い前後の学年の授業の教えは予習復習に繋がったと思われます。お陰で日本語の読み書きも出来スペイン語、英語も出来る子供達に育ちました。長期滞在の日本人親子がスペイン語で会話をしているのを聞き、それだけは避けたく友人の家族達と交流を深めた甲斐もありました。

約 12 年半もの長期の駐在になり、高校には再度アメリカンスクールに入学をしなおして卒業しアメリカの大学受験の 3 種の資格試験で日本の大学に推薦入学ができ塾通いや受験勉強の苦労は知らないまま学生寮のある大学に電車の乗り方も良く知らないのに初めての東京の寮に 1 人で帰って行き、その後 2 人も同じ大学に入学しております。当初日本の大学の受験は不可能と言われていたのが海外子女の受け入れが進みお陰で助かりました。

（1985 年頃ペソと円が徐々に逆転して生活は日本人に取っては随分と楽になりました。）

日本の食文化を知らない子に育つことで将来味覚が親子に違いが出来るかも知れないと現地の材料で色々なオヤツや、料理を工夫して良く作りました。1990 年代になって会社も 1 部ですが注文をすれば日本食の缶詰や乾物などを送って呉れる様に成り助かりましたが社長宅は無料だった為にオヤツの注文を出して呉れない主人が枷になりオヤツ文化の知らない子供達に育つ事を恐れ現地事情調査員が来た時に有料で取り寄せる要望を出して受け入れて貰い以後送られて来て子供達より大人が喜びました。

与えられた環境に親子共々悩みながら入って行き、努力と工夫をして地域社会の皆様と安全に身を守る等の役割も果たし同好会や色々な行事を計画実行し 2000 年 10 月に主人の突然の死が訪れる迄を楽しく有意義な海外生活を 11 回の住所を変えながら過ごしました。

1980 年チリは準戒厳令でしたが博物館見学なども毎月行って大統領官邸も身分登録をして事前申し込みによって見学して来ております。チリ駐在が 12 年半と長くなっているために、軍政ピノチェット時代の質素な官邸とその後の民生大統領時代のキイロの間と言って綺麗に整備され黄金色に輝く室内を見学しております。

アゼンデ政権時代の経済封鎖による生活必需品がなくて国民が困窮したことや、他国に侵略されそうになった事で、ピノチェット他 4 軍（陸軍、海軍、空軍、警察）の将軍たちが立ちあがって選挙で成立した政権を（38%）倒した事は世界からは色々な批判

を浴びましたがチリ人達は、政治に慣れない彼らの腐敗政治に怒りをぶつけて（実際に当時被害にあった日本人長期滞在者から話を伺いました）国民投票で軍事政権を今後８年間続けることを問うた時に７４％余の賛成投票をしてピノチェット将軍を大統領にして政権を支持しております。８年後に再度国民投票で軍人政治を続けるかを問う戦で（1 月間に渉って若者達を使いサッカーの応援合戦の様な激しい連呼や道路に大量のビラを撒き散らした運動資金はどこから出たのでしょうか）破れ､後日の大統領選挙で５２％対４８％の僅差と思える負けに対して、世界に流されたニュースは大差で負けたと報道されております。

チリの悪い面ばかりが強調されており、あまり日本では正確な報道がなされていないと思います。ピノチェット大統領の５台の車列に襲撃を加えて乗車位置を変えていた為に被害に有ったのは真ん中の車でした。砲弾でボコボコになった車をモネダ宮殿に 1 年間展示して有った事等を日本で知っている方は何人おられるでしょうか。

清廉潔白な政治を行い交通警察も事故や違反でも袖の下等は取らない等、他国の酷い警察を体験している身には、今日のチリの繁栄の基礎を築いたと称賛したく思っています。

軍人政治は独裁者が当たり前の概念で有る為かピノチェットは選挙で当選した政権を倒して勝手に居座ったと米欧亜回覧の会で講師として元新聞編集者が言っていたのを聞いた時から何時かは皆様に国民投票で支持され 5 人の合議制で案件を決めていた事を知らせたく思っておりました。

（私のチリ駐在生活で非常に強い印象を受けた体験です）

私はコントラックブリッジ｛（トランプゲームの中で一番面白いと言われ世界大会もあるゲーム）（オリンピックのサイドゲームにとも言われている）（名手には山本五十六、アイゼンハワーなど）｝を覚えゲームにチリの人達から誘われて、女性のサンチャゴ代表の出場権を勝ち取り全国大会で準優勝をしております。その大会の時にホテルを予約していたのをわざわざ解約させ、個人の別荘に 3 日間も泊めて下さり大勢のお仲間とゲーム後の交流会を開いて下さった人達の親切な行動に今も忘れる事の出来ない体験をしています。

２０テーブル８０名程でコントラックブリッジゲームを楽しんでいた静かな会場に突然の拍手が沸き起こり何事かと思って、パートナーに聞いて驚いたのはピノチェット大統領が再選挙に出ることになっての喜びの拍手だったのです。ラジオのニュースをイヤホンで聞いていての事でした。言論の自由は有りニュースに敏感な国民で、自分の意思表示をはっきりと出せる明るい社会でありました。ゲームの会場で私が選挙権を持って居ることが分かると自分は誰々に投票するが、貴方は誰に投票するかとか１、000 ペソの金券の様な綴りを出して来て話しかけられたので、贈収賄なんかには応じない心算で断ったのですが、何と恥ずかしい事か応援のための寄付を求められていたのです。

（5 年以上の外国人居住者にも選挙権は与えられました）（夫婦別姓の女性優位の国です）

選挙権登録をしている人が実行出来る投票も前後左右，上下とも閉めて誰からも見えない処で記入し糊付封印して、終わると手にスタンプを押される等とても厳重な選挙でしたのに日本のニュースキャスターが選挙違反をしているような報道をしていて呆れました。

（後日送ってきたビデオテープによる）

軍人の御夫人達がボランティア活動で日本人婦人会まで来られて自弁で交通費を払っていろいろな事に援助活動をしているお話をして下さった時に日本人会ではタクシー代など平気で請求している現状と比べて感銘を受けました。

大統領官邸兼迎賓館の建設工事を進めると賄賂の監視の目が張りめぐらされ偽情報も出されるなど色々な批判が酷くなり最終的に軍人会館に変更した建物で私はブリッジゲームを 5 回ほど行って居ります。豪華絢爛とは程遠い建物でした。

自国の社会通念で他国の社会の有り方を批評する事だけは避けて事実関係を良く調べてからコメントは言うべきと思って居ります。都合の良い処だけ報道して世界を欺く手段は
今も同じやり方が横行しているようでニュースを斜めに構えて見聞する習性が今もついて何処までが本当の事か等と疑いの目を向けてから判断しております。明治の歴史も、都合の悪い処を何処まで正確に報道されているかと穿っております。

チリ人の置かれた環境は日本人と似ている処があります、前は太平洋、後ろはアンデス山脈、北は砂漠、南は南極という、逃げる所の少ない国では国民は正直者、働き者、人に親切，綺麗好き、識字率は良く・・・など今では中南米の優等生と言われております。

長野県についても同じ事が言えるのではと感じました。海のない県での生活は選択肢が限られ自然と農耕民族特有の生活の知恵が働いていると思われます。

教育県で過去に名を揚げて今は健康県で名を馳せて居るようですが、県民の切磋琢磨と思われる行動や各種の行事などは、旧中込学校の全村民の寄付による学校設立は、大変な協力関係が有った事でしょう。明治に偉大な意識と知識の持ち主達と、それを纏める指導者が居られた賜物と思いました。

佐久間象山などを輩出している事も江戸時代から文化の程度が高かったのを表しておられる故に文豪の島崎藤村たちの明治時代の活躍に繋がっているのだろうと感じました。

文化勲章も拝受された画家の小山敬三も居られ、美術館も拝見出来た事に深い感銘を受け、その他の文化人や偉人を多く輩出していることに驚き余りにも自分の知識のなさを実感して、この米欧亜回覧の会に入会していて本当に良かったと思いました。

日本では自分の意思を鮮明にする事は大変な勇気のいる事で成るべく他人の意見に付和雷同することが生活の知恵のような人達が多くいる中で指導的立場になる人たちの努力が伺え明治になる生みの苦しみを味わった名残が各所に有るように思われました。

吉田松陰なども明治になるための大きな犠牲を払っていることは残念でなりません。今でも日本人はあまり自分の意見を言わないで後から批判をするのが得意の様です。

外交問題でも外務省の指導で、意見や問題の追及をしないように等とテレビニュースで言っているのを聞き、やはりと感じました。

世界の政治の場でも日本人に喋らせることが出来れば等とジョークを言われているようです。最近やっと少しは意見を言える人が出てきているようですが、まだまだ大勢の方々までは無理が有りそうです。私も郷に従って来ているようで反省しています。タダ、主張ばかりで実行が伴わない国民が多く物事が前に進まない国も困りますが。

一寸残念だったのは明治になってからの西洋の建築様式の建物を重要文化財に取り入れている所を、大勢の人の見学場所にしていることでした。中南米にいる時は日本の建築物は一切なく西洋建築物ばかりを見ており又、住んでも居りましたから少し違和感を抱き、もっと日本の歴史的建造物の素晴らしい物が有る筈なのにと首を傾げておりました。

長野県にも伝統文化は沢山あると思います。バスの中から見た家並は立派な建築物が多く見受けられ、それをモット見学場所に取り入れて欲しく感じました。

その中で、橘倉酒造(株)の３００有余年の伝統ある処と素晴らしい貴重な美術品の数々を見学出来たのは大変幸いな事で有意義な旅でした。

健康に良いと言われる醗酵食品を商品に組み込み、力を入れておられる姿にも感銘を受けました。お土産に買って送ってもらった、甘酒から出来たコンフィチュールは幼い孫がパンにぬりパクパクと喜んで食べているようです。

見学に当たり股関節の痛みが思うように治って居なくて皆様にご迷惑をお掛けしないようにと思い別行動で休みをとりながら見学しておりましたのに、わざわざ車いすを借りて来て体重の気になる体を乗せて押してまで見学をさせて下さったご親切は終生忘れる事は出来ないであろう幸せな見学でした。ずいぶん重かった事でしょうに有難うございました。

井出様の奥様の介助のお手が力強く、又、暖かく人様との交流のベテランでいらっしゃるとお見受けして私も、その様になりたく思いました。

皆様のご親切に接し、もう少し私も何か出来る事が有るのではと考えを改めております。

完璧な準備をして下さった幹事役の小野様、井出様、その他の方々のお陰様で何時もの和気あいあいの気分を満喫出来た事**は**得るものが多くあり幸せなツアーでした。

色々と有難うございました。

信州・佐久・小諸の旅路に想う

橋本吉信

豊かな自然との出会い

江戸っ子にとって、大自然と風土に恵まれた信州は「異郷」であった。田舎に親戚がない小学生にとって、夏休みを田舎で過せる友達を羨ましく思った。目新しい環境の変化に出会うことはなく、綴り方（作文）はテーマが見つからず苦手であった。今思えば、当時の東京・大森には海も川も畑もあり、はぜ釣り、蝉やトンボ採りで遊びまわる日々だったので、身辺への着眼と観察への指導があれば良かったと思う。

ある夏、旅好きの叔父が兄と共に信越の山荘へ連れて行ってくれた。小川のせせらぎに沿って辿る小径の草むらには真っ赤な野苺があり、キリギリスが跳ね、飛沫をたてて水車が廻る。水車小屋から聞こえる脱穀の音、白樺造りの山荘には赤トンボが群れをなして夏空に舞っていた。「絵本の中の世界」のような、豊かな自然との出会いであった。

長野県民が誰でも愛唱するといわれる『県歌・信濃の国』は、ふるさとの豊かな風土・歴史・文化を十分に詠んだ名作だと思います。

浅間山・初めての登山

長野県と群馬県の県境にまたがる活火山「浅間山」は、信州軽井沢、浅間高原のシンボル的存在である。標高2568m、山頂に噴煙を吐くコニーデ型の雄々しい山容が、連峰の中央に聳えている。

1956年（昭和31年）早大2年の夏休みに、初めて「本当の登山」をする機会が来た。
「山登りをしたことがない」と聞いたESSの仲間が、もう一人の学友と故郷の「浅間山登山」に誘ってくれた。佐久・岩村田の彼の実家に泊り、涼しい夕刻の「小諸口」から「火山館コース」の登山道を辿った。寝転んで夜空を仰ぐと、大小の星々が降り注ぐように眩しく輝いていた。

粗い火山灰、真っ暗な尾根道を踏みしめながら、やっと「火山館」に辿り着いて暖をとり、他の登山者と合流して一安心。目指す頂上に至った頃、彼方の雲が急に光を増し、眼下の雲海の切れ間に緑の原野が広がった。予期しない「ご来光」であった。思わず太陽に向って”万歳！”を叫んだ。感動の瞬間、一生忘れない光景である。この浅間山の登山体験が、その後の私の登山、山歩きへの引き金になった。

佐久・岩村田との再会

私は仕事を定年退職した翌年の1996年、男声合唱団「明治学院グレゴリーバンド」に加入しました。
1914年に結成され、藤原義江、桑田秀延、鳥居忠五郎など、日本を代表する音楽家、神学者が歌い活動していました。戦後1959年に「男声聖歌隊」（ア・カペラ）として再結成され、創立100年を迎えます。毎年8月の2日間、合

唱奉仕のために佐久市の教会や施設訪問が、この合唱団40年来の「年中行事」になっていました。

関越自動車道から上信越自動車道・下仁田ICから信州街道に入り、蛇行する難所「内山峠」のトンネル群を走り抜ける間、特異な山容の岩山「荒船山」が車窓に迫って来ます。
群馬県下仁田町と佐久市に跨る標高1423mの頂上部は平坦な安山岩の台地ですが、北端の200mの垂直な断崖絶壁「艫岩」（ともいわ）は、荒海を驀進する巨船を思わせる姿で屹立し、周囲を圧倒する。57年も前、岩村田から「初谷鉱泉」、「神津牧場」、「物見山」（1375m）へ、3人でてくてくと歩き通してここに立ち、眺め下ろした忘れ難い大岩壁である。

濃霧とカーブの多い登り坂とトンネル群を走り抜けると、眼の前に「佐久平」の眺望が明るく開けます。
目的地の「佐久総合病院」と「岩村田教会」に向かって、咲き始めた「コスモス街道」を走ります。広い佐久平には、噴煙を漂わせる懐かしい浅間山どんどん近づいて来ます。

今回の信州ツアーで訪問・見学をさせていただいた井出さんの実家「橘倉酒造」の堂々たるお屋敷が、その途中の交差点の角地に在るのを見ながら、毎年通り過ぎていました。その醸造の様子を見学するとともに、先代が親交を持たれた孫文、中江兆民や明治の要人達の揮毫を多数拝見することが出来ました。
元禄9年に創業した伝統ある蔵元を継承し、時代の変化に対応して、郷土発展の基盤となり、高品質な商品の生産と販売に、新体制で挑戦しておられるお兄様を中心とする親族、職人の方々の家業への意気込みを伺い、心から繁栄を祈りました。

佐久・岩村田の「酒造組合会館」の庭に『信州佐久は酒の郷』の広告塔があり、若山牧水の歌碑がどっしりと据えられています。 牧水は『浅間が美しい、鯉がうまい、酒の味が忘れられない』と言っては、しばしば佐久を訪れていました。『白珠の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり　　酔牧水』と詠み記されています。「橘倉酒造」の店に『酔歌五首　酔牧水』の詩が掲げてありました。

この庭には酒造の神社があり、背中合わせに「日本基督教団・岩村田教会」の十字架の尖塔と会堂、付属の「小雀保育園」が建っていて、奇妙なハ―モニ―の風景を見せています。

佐久総合病院と岩村田教会、佐久の発展と変貌

佐久の地は、農村・地域医療の取組み、高齢者検診の充実、減塩指導の徹底などによって、高齢者の脳卒中による死亡率を大幅に改善し、余命年齢を世界一の水準に引き上げた先駆的な医師達によって、「医の精神」が重んじられて来ました。
佐久総合病院の創立者・若月俊一院長、佐久浅間総合病院の吉沢國雄院長、現在・諏訪中央病院の鎌田實院長の貢献が広く知られています。

男声合唱団「明治学院グレゴリーバンド」に所属してから、今年で17回目の佐久への訪問になます。
8月17日（土）に「佐久総合病院」（佐久市・臼田町）を訪問し、難病棟と付属高齢者健康センターの2か所で、夫々十数曲の合唱で慰問奉仕を行ないます。
若月俊一院長と私達との交流は2006年に96歳で亡くなられるまで40年に及びます。いつも若々しい笑顔で私達を迎え、励まして、職員の方々と共に写真に収まって下さいました。日本農村医学会創立者、国際農村医学会名誉会長を務めました。

2日目は岩村田教会（プロテスタント系、1948年創立）での礼拝献唱と、合唱演奏会奉仕を行ないます。付属の「小雀保育園」の保母先生と父兄の合唱も加わります。懇親会で語られる佐久の生活、教育、社会、行政の問題や姿が、貴重な情報になります。
「浅間山登山」から半世紀余りを経て「岩村田」とのこのような偶然の再会を感慨深く、幸いに思います。

それにしても、1997年10月、北陸新幹線（長野新幹線）の開業と「佐久平駅」開業後の周辺区画整理、商業地、住宅地の急速な発展と変貌には眼を見張り、今昔の感で感慨深いものがあります。
半世紀前の小海線「岩村田駅」から歩いた長閑な田圃、学友の農家の茅葺の家の風景が懐かしい。

（参考資料）　井野俊介「北陸新幹線建設と小諸・岩村田の都市間競争」（空間・社会・地理思想15号2012年）。（北陸新幹線のルートと駅選定に関わる小諸・岩村田の対照的な盛衰を実証）

<u>島崎藤村・新体詩の集大成と青年への期待</u>
島崎藤村は自然主義文学の頂点に立つ作家である。もともと「散文」を志して文学修業を積んでおり、文学への出発点は、明治学院在学中の「キリスト教・洗礼」を機に、ヨーロッパ文学への関心を持ったためといわれる。
1897年第1詩集「若菜集」を出版して近代詩の確立に貢献。最後の詩集「落梅集」を1901年（明治34年）に出して、1904年（明治37年）には全詩集を合本した「藤村詩集」を出版した。藤村の「詩業」はこれで終わるはずであった。

しかし、母校明治学院・井深梶之助総理（学院長）から、藤村に校歌作詞の依頼があった。
1906年（明治39年）34歳の時であった。藤村は「自分はまだ筆を持って働く一介の労働者」であるとして固辞したが、自分を育ててくれた母校への恩返し、義務であり名誉なことと考えて快諾した。
その頃、小諸義塾の教師を辞めて、多額な出版費用の工面をして背水の陣で小説「破戒」を自費出版し、文壇に打って出ていた。さらに3人の娘を次々と亡くし、冬子夫人も眼病を患ってしまうという惨憺たる生活状態にあり、彼の人生は最も不幸続きの時でもあった。

小説「破戒」は、夏目漱石から「後世に伝うべき名編」との評価を受け、本格的近代的小説の先駆け、金字塔の作品として実った。

校歌はそのような逆境の中で作詞された。『ああ行け戦え、雄々しかれ』とは、自らを励ます

言葉でもあり、自ら作り上げた「新体詩」の最終到達点としての「結晶」を、この校歌に示したといえる。

藤村の詩の中でも、『小諸なる古城のほとり～』の詩に匹敵する傑作、極めて「芸術性の高い歌詞」であり、全国の校歌の中でも稀にみる優れたものだと思う。
学校の名前も「神」や「キリスト」の字もないが、聖書の言葉がさりげなく込められている。1番だけの3分30秒間の美しい校歌である。
間もなく夏の「全国高校野球」が展開される。勝利の校歌が甲子園の空に響きわたるが、この校歌に比肩するものはどれだけあるであろうか。

「藤村詩集」の序には、この歌詞と対応するものがあり、大変興味深い。・・・・
『ついに新しき詩歌の時は来たれぬ。そはうつくしき曙のごとくなりき・・・誰か旧き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじし新しきを開かんと思へるぞ』とある。

（参考）明治学院歴史資料館・原豊 「藤村が校歌に込めたメッセージ」（2008．10）

明治学院校歌

作詞　島崎藤村　　作曲　前田久八

人の世の若き生命（いのち）のあさぼらけ

学院の鐘は響きてわれひとの胸うつところ

白金（しろかね）の丘に根深く記念樹の立てるを見よや

緑葉は香（にお）ひあふれて青年（わかもの）の思ひを伝ふ

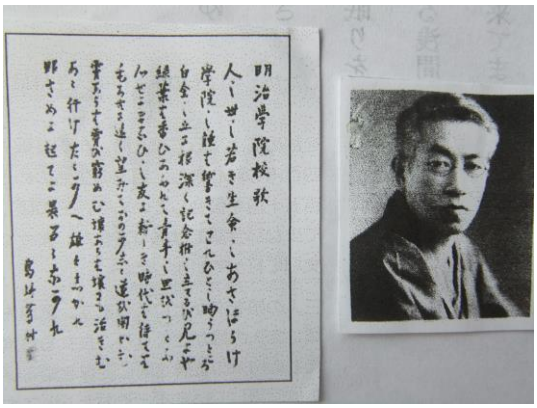
心せよ学びの友よ新しき時代（ときよ）は待てり

もろともに遠く望みておのが志（じ）し道を開かむ

雲（そら）あらば雲（そら）を窮（きわ）めむ壌（つち）あらば壌（つち）にも活きむ

ああ行けたたかえ雄雄志（おおし）かれ

眼さめよ起てよ畏（おそ）るるなかれ



藤村は将来ある学生・青年に対して、「新しい時代に希望をもって、一人一人がその道を切り拓いて欲しい」というメッセージを込めて、強く願ったのであろう。
島崎藤村の自筆による校歌碑が白金台（港区）の母校・明治学院のチャペル横に建っています。小諸・懐古園内の「藤村記念館」には、その拓本が展示されていました。
今回の「信州歴史ツアー」に参加して、明治時代の歴史的人物が、学び、育った郷土の足跡を訪ねることが出来ました。そこに一貫するものは、「学び、育とうとする高い志と闘魂。それを育て支える情熱と風土」であることを実感しました。

以上

象山と小楠の人脈

小野博正

佐久間象山

横井小楠

幕末に活躍した志士で、佐久間象山と横井小楠のふたりの影響を受けなかった者はいないとも言われています。明治維新の立役者である、勝海舟、坂本龍馬、西郷隆盛、吉田松陰等も然り。だがこの二人は、象山が１８６４年，小楠が１８６９年にそれぞれ京都に於いて相次いで暗殺されているが、直接の面識は生涯なかったようだ。

象山はアヘン戦争（１８４０－４２年）の後、当時老中として相模・房総の海防掛だった松代藩主・真田幸貫の求めに応じて上申した海防建白に「敵に大艦あれば大艦を、巨砲あれば巨砲を作るべし」と“夷の術を以って、夷を制する”必要性を説き、藩主からその研究を命ぜられると、江川太郎左衛門英龍（坦庵）に押しかけ入門して、砲術、海岸砲台の整備、海軍の創設などを学びました。江川坦庵は伊豆韮山の伊豆・相模・甲斐を支配する世襲代官（七万石）で、大型軍艦を建造して、航海に習熟し、海軍力によって外敵を迎え撃つとの海防論を展開しました。親友・渡辺崋山と共に江戸湾防備の要諦は、浦賀水道と富津台場の防衛ラインの重要性と下田防備を説いて、後には実際にお台場に五基の砲台を建設、韮山に反射炉を建設して大砲製造の基礎を造り、韮山式小銃（師・高島秋帆の燧発銃の改良版）を量産、洋式帆船“へた号”を建造する工学家でもありました。

象山（３４歳）と海舟（２２歳）が、初めて会ったのは１８４４年です。６年後の１８５０年、江川坦庵に学んだ象山が開いた塾に海舟が入門しました。翌々年に、海舟は妹・順子を象山に嫁がせます。１８５３年にペリー来航すると、老中阿部正弘は広く外交・海防に就き一般に意見を求めた機会を捉えて、海舟は象山から学んだ海防意見書を上申しました。それが阿部正弘と大久保忠寛（一翁）の目に留まり、海舟の出世の糸口となると共に、一翁・海舟の終生の絆が生まれました。周知のごとく二人は、江戸城無血開城に際し、幕府側の最高責任者として維新政府への橋渡しの主役を演じることになります。

ペリー来航の前後から、象山塾には、小林虎二郎（米百俵）、河井継之助、吉田松陰、加藤弘之、津田真道、坂本龍馬、橋本左内、真木和泉、山本覚馬など幕末・維新の重要な脇役を務める人材が続々と入門しました。

特に、吉田松陰は、家学の山鹿素行を除けば、象山が身近に接した唯一の師でした。松陰が下田踏海の擧に破れて捕らわれた時、象山は教唆の罪に連座して、故郷・松代に幽門されましたが、松陰の主著のひとつである『幽囚記』が象山の勧めで書かれたことは、その跋文に明記されています。「安政元年９月、江戸獄を脱し、象山と別れる。先生、時に余を顧みて曰く。（汝の已むに已まれぬ渡航熱を）何ぞ力めてこれが書を著

し、本謀の然る所以を明らかにせざるかと。余再拝して命を受く。己に国に帰り野山獄に囚せらる。初めて獄吏に請ひて紙筆を求め、急にこの録を成す。」と。幽囚記の海防策の骨子は象山の説そのままと言っても過言ではありません。

自分の優秀な血筋を継ぐ子孫を増やしたいからと友人に妾を世話しろと依頼する人を食った豪放・怪傑の象山と誠実で実直な松陰と如何に意気投合したのか不思議ですが、象山の経学・砲術の実学に、行動力の松陰が感応したのでしょう。

一方、海舟に、“明治維新は横井の思想を西郷が実現した”と言われた横井小楠は、熊本藩士の家に生まれ、海舟より１４歳、西郷より１８歳年長で、島津斉彬と同年でした。

横井は藩校・時習館に学び、藩命で江戸に遊学。藤田東湖、川路聖謨らと交友、帰国して実学党を結成、藩政改革を試みますが、藩内主流派の反撃を受け失敗。私塾『小楠堂』を開きますが、酒の失敗などで熊本藩では用いられず、２０余藩を歴遊。吉田松陰、橋本左内らと交友がありました。小楠は、橋本左内に心服し、その誘いで福井藩主・松平春嶽に招かれてその政治顧問となり、万延元年,「国是三題」を著し、開国通商、殖産興業による富国強兵を提唱。春嶽が政事総裁職に就くと、そのブレーンとして幕政改革や公武合体の推進に手腕を発揮します。維新後、新政府の参与となるが、明治２年暗殺されました

文久２年１１月、軍艦操練所頭取として、軍艦奉行並（１０００石）となった海舟は、慶喜が将軍後見職、春嶽が政事総裁職となった時、横井小楠を訪ねて、海軍を論じ意見一致し、「俺は、今までに恐ろしいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲とだ」と後年述べています。同じ年、海舟の門下生となった坂本龍馬は、海舟の勧めで小楠に会い、「西郷や大久保たちがする芝居を見物されると良いでしょう。大久保たちが行き詰ったら、そのときちょっと指図してやってください」と横井に話しています。龍馬の「天下一統、人心洗濯願うところなり」の言葉と「船中八策」「新政府綱領八策」は、小楠の幕府に提出した「国是七条」と福井藩に提出した「国是十二条」の具現であり、由利公正起草の「五箇条のご誓文」も「国是十二条」が基礎にあると言われます。

吉田松陰も「先生（横井）の東遊の節は、是非萩に立ち寄って、藩の君臣を指導してほしい」と懇請していますし、高杉晋作も「小楠を長州藩の学頭兼兵制相談役に招きたい」と久坂玄瑞に相談しています。

倒幕を実現した人脈である小楠、海舟、龍馬、西郷、高杉らの連合は、こういう関係の中で生まれたものです。

やはり、幕末から明治維新への激動の時代に、佐久間象山と横井小楠が果たした役割は大きかったと言えそうです。

吉田松陰

勝　海舟

橋本左内

俳句で辿る信濃紀行

小野博正

今回は、久々の国内歴史ツアーである。会員の井出亜夫さんの発案・企画で、参加者１６名を得て、去る５月１５，１６日の一泊二日間で催行された。各地からそれぞれ新幹線長野駅に集合して、バスで松代に移動、市内の竹風堂で山家料理の昼食を一緒にとった後、今回の旅の目玉の一つである松代の佐久間象山関連の史跡めぐりから始まった。案内人は、地元ボランティアの佐久間さん。象山のことなら何でも、（漢詩までも）諳んじている方で、最適任者であった。この日、長野は日本一の気温を記録して２９度の夏日だった。

象山を巡る信濃の薄暑かな
緑陰を選びて辿る象山跡

松代生まれの象山（地元では、ぞうざんと読む）は、幕府海防係の藩主・真田幸貫に、海防八策を上書、それがもとで、黒船打ち払い令の撤廃が実現する。江戸で、象山塾を開き、吉田松陰、高杉晋作、武田斐三郎、小林虎三郎、河井継之助、勝海舟、坂本龍馬、橋本左内、山本覚馬、加藤弘之など幕末の志士多数が入門し、その影響を受けた。象山神社、墓のある蓮乗寺、象山記念館と文武学校（１８５５開校）を見学する。象山の意見で建設された文武学校は、蘭学など文学所（漢方、西洋医学）と、剣術、柔術、弓道、槍術など文武総合学校で、いくつもの畳敷の教室を持ち、広々と開け放して気持よく、緑の涼風をしばし楽しみつつ見学した。

緑風を入れて文武の大広間

この地に、終戦間際に、大本営本部を移設する計画があったとは驚きである。岩盤のトーチカで守ろうとしたという。

次は、一路、上信越道で小諸懐古園に向かう。小諸城址は、広大な敷地内に、藤村記念館，徴古館、小諸義塾記念館、小山敬三美術館などが散在し、夫々に自由散策して新緑を満喫し、夕刻、藤村ゆかりの中棚荘に投宿する。

麦笛や青春遥か遠く来て
薫風やぴんころ地蔵赤頭巾
初夏の風に親しき懐古園

リンゴの湯や露天風呂で暑かった一日の汗をぬぐったあと、夕食の宴会となり、お互いに自己紹介や近況を語り合い、終わると藤村の間に、再び集まって、夜のふけるのを忘れて、幕末の志士になったような気分で、歴史や政治を語りあった。

藤村のゆかりの宿や夕蛙
新緑の山峡の宿林檎の湯
露天風呂樟の落ち葉をかき抱き

翌朝は、風呂へ入ったり、うさぎや

羊や鴨や鶏がいる広い庭を散歩したり、千曲川まで歩いたり、水明館を訪れて藤村の気分に浸ったりして、てんでんに朝食前の一時を過ごし、名物の麦とろろ朝食をとって宿を後にして、この日から加わった山田さんの待つ、旧中込学校へ向かう。

明易や遊子心地に大河まで
明治より学び舎守りて藤の花

中込学校では樹齢１００年を超す大藤の満開の花に迎えられる。現存するもっとも古い擬洋風学校の一つで、明治８年に、佐久市の村民の寄付で建設された。ステンドグラスの窓とオルガンのある教室、建物の上に、八角楼があり、太鼓を鳴らして、時を告げた。

長野には、松本にもやはり地元民の寄付で開校した旧開智学校がある。

たんぽぽを踏みて辿りし五稜郭
佐久鯉を誉めて袷の老女将

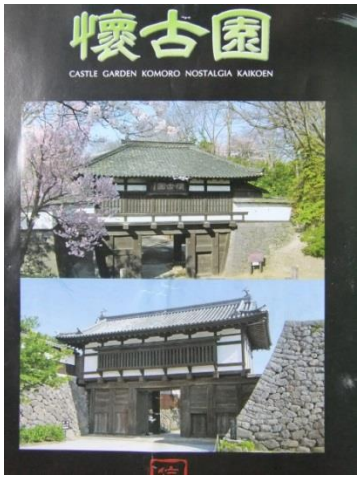
次に、龍岡城の五稜郭を見る。今は小学校になっているが、函館の五稜郭と同じ武田斐三郎の設計による。

このあと割烹“花月”で名物の佐久鯉の料理を楽しみ、今回の旅行のもう一つの目玉である、井出さんの実家でもある橘倉酒造を訪ねる。

マロニエの花と、庭のボタンと、よく冷えた甘酒に迎えられる。元禄９年の創業の老舗で、代々の戸主と交友のあった有名人の遺墨が数多く所蔵されている。今回はそのいくつかを展示して見せて頂いた。佐久間象山、勝海舟、大久保利通、三条実美、副島種臣、松方正義、斉藤実、伊東巳代治、浜口雄幸、犬養毅、安部磯雄、田中正造、松村謙三、木戸孝允、伊藤博文など，垂涎の遺芳の数々を心行くまで鑑賞させていただき、近代の酒造りの作業工程の映写、酒蔵見物、日本酒の試飲などを楽しみ、惜しみつつ、井出家を後にして、新幹線佐久平駅にて一同解散して旅を終えた。井出さんの名企画と、ご一家を挙げてのおもてなしに心から感謝したい。

マロニエの花くれなゐに遺墨展
古書曝し老舗酒屋の蔵屋敷
牡丹にてもてなし心遺芳展
甘酒や信濃の山河辿り来て

終



編集後記

新緑の信州旅行から、早くも３か月となり，秋の気配を感じる頃となりました。皆様のご協力で素晴らしい文章が集まりました。思い出のよすがになれば幸いです。また、旅でお会いしましょう。

蜩や人生の秋悟る頃　　（博）

２０１３・８・１